

# 我が国初の2層半螺旋型高架橋 音戸大橋



呉市警固屋町と音戸町の狭水道「音戸ノ瀬戸」には、平清盛が厳島航路の整備にあたり一日で開削しようとしたが、今一息のところまで太陽が沈みそうになったので、手にしていた扇を開いて太陽を招き戻したために、開削できたという「日招き伝説」があります。また、平清盛の供養塔と伝わる清盛塚は、音戸ノ瀬戸の西岸倉橋島に近接した岩礁の上に石垣を築いたもので、宝篋印塔1基が建てられています。

音戸ノ瀬戸は安芸灘と広島湾北部の間を航行するには最短コースのため、多くの小型船が通航していますが、この瀬戸は幅が狭く湾曲しています。この見通しが悪く潮流も強い瀬戸を、渡船は1日250往復し、6000人の利用客と自転車、車両を運んでいました。このため、最も狭い箇所は85mという音戸ノ瀬戸に一日も早い橋が求められていました。

昭和35年(1960)、日本道路公団(現・NEXCO西日本)の有料道路として、瀬戸内海で初めての本土と離島間の架橋事業が始まりました。建設に当たっては狭小な音戸側の用地の制約と1000トン級の大型船舶が航行できる桁下高さの確保が求められました。この条件をクリアするため、一つはわが国初となる「2層半螺旋型高架橋」、二つ目には警固屋側の地形をうまく生かしたループ式道路を採用し、桁下高23.5mという条件を可能にしました。設計に当たっては、実物大の平面走路で検証を行い、円形高架橋が採用されました。

渡海部分は音戸ノ瀬戸を一跨ぎできることという条件から、主径間116mのランガー形式に決定されました。当時この形式の道路橋としては我が国で最長の橋でした。真っ青な海峡に映える朱赤は、清盛が音戸ノ瀬戸を通して厳島神社に参詣したとの伝説により、大鳥居の色にあわせたのだといわれています。

昭和49年末償還分を広島県が補填し、音戸大橋は無料となりましたが、渋滞が日常的となり、また螺旋型の取付道路には歩道がなく、歩行者から敬遠されていました。こうした課題を克服するため、平成7年度に第二音戸大橋事業が着手され、ようやく平成25年3月に供用が開始されました。



音戸ノ瀬戸に架かる音戸大橋と第二音戸大橋

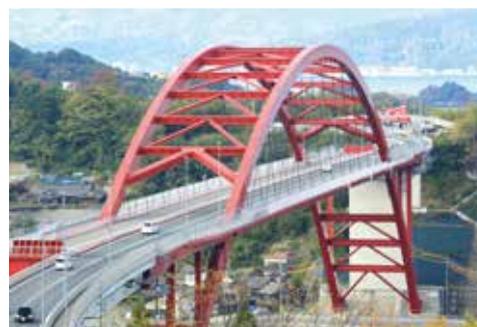
## ■位置図



広島県指定史跡「伝清盛塚」  
平清盛の供養塔と伝える清盛塚は、岩礁の上に石垣を築いたもので、宝篋印塔1基(高さ2.05m、室町時代の作)が建てられている。



音戸大橋のループ式道路  
手前が警固屋側、音戸大橋の向こうが音戸側



第二音戸大橋の愛称は清盛伝説にちなみ「日招き大橋」